



主張

## 「いい学校」をつくるには

福崎 彰彦

私たち校長は「いい学校をつくらう」と日々努力をしていますが、果たして「いい学校」とはどんな学校を指すのでしょうか。このことについてヒントをくれる本に塚越寛（伊那食品工業代表取締役会長）著の「いい会社をつくりましょう」があります。塚越氏は、「この会社に関わる人みんなが幸せになるために会社がある。会社を取り巻く全ての人々が日常会話の中で『いい会社だね』と言ってくれる会社を目指したい。」と述べています。このことを学校にあてはめると、学校に関わる全ての人たちが「いい学校だね」と言ってくれるとともに、教員自身もいい学校だと言えることではないかと思えます。きっとそれは、生徒にとつては授業が楽しくよく分かり、保護者は学校に信頼を寄せ、地域の活性化に貢献しているような学校であり、当然ながら教員が生徒の育成のために熱心に取り組んでいる学校のことでしょう。このような「いい学校」をつくるカギになるのは何と云っても教員です。具体的には「教員の意欲向上」と「人材育成」が重要だと思えます。

まず「教員の意欲の向上」には、教員のチームワークが大切です。塚越氏の会社の社是には「ペンギンのくちばし」というものがあるそうです。ペンギンには歯がありません。それでも魚を捕ることができるのは、くちばしの中の毛の生え方に特色があるというので



す。全ての毛がみんな内側に向かって生えているため、毛の一本一本の力は弱くても、同じ向きになって集まったことにより強くなるということから、社員一丸となることを示唆した社はだということ。学校にも同じことが言えます。教員全員が目標に向かって共通理解をし、共通歩調で進めば大きな力になります。そのためには校長が教員に目指すべき方向を明確に示し、教育理念を共有できるようにすることが前提となります。また、教員の意欲の向上には評価・称賛が有効であることは言うまでもありません。称賛されることで、自己有用感が高まり意欲も向上します。そして教員同士が相互に認め合うチームワークを生かすことにより、先を見通した取組ができるようになれば、広い視野で生徒を見つめ、生徒の良さにもより多く気付くようになります。そうなれば自然に生徒を褒める機会も増え、生徒も充実感を感じ、それはまさに学校全体の活性化につながるのです。

もう一つは、「人材育成」です。大量採用時代を迎え、若年教員の育成は急務です。香川県では教科・教科外ごとの研究組織を活性化することで育成を目指しています。県下の全教員が教科及び教科外の研究会に属し、郡市単位の研修会や全県の教員が一堂に集まる夏季研修会や研究発表大会等で研究活動に取り組んでいます。県下統一の共通の研究テーマにより、協議の視点が明確になっているため、ベテランが若年に指導をする機会も多く見られ人材育成の大切な場になっていますし、若年教員の意欲化にもつながっています。

今後「教員の意欲向上」と「人材育成」を推進することにより、学校に関わる人たちから「いい学校だね」と言ってもらえる学校づくりを目指して努力していきたいと思えます。

(全日中副会長・前香川県坂出市立坂出中学校長)